

「キリストが形づくられるまで」

2020年08月21日

私の子どもたち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、私は、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。できることなら、私は今、あなたがたのもとにいて、語調を変えて話せたらと思います。あなたがたのことで途方にくれているからです。(ガラテヤ書4章19節～20節)

パウロは、語調を変えて、ガラテヤの諸教会の信徒たちが、キリストの真実によって、無償、無条件で義とされたにもかかわらず、再び律法や割礼など、人間の作った価値観に倣い、従う奴隷になったことを嘆き、怒りと悲しみを込めて筆を進めている。あなたがたは神を知らなかった当時、神でない神々の奴隷であった。だが、今や神を知らされたのに、正しくは、全能の神に全てを知られているのに、再び、奴隷になることを望んで、無力で貧弱な諸々の霊力に逆戻りするの。あなたがたは、日や月や季節や年などを守り、祝いの日、呪われた日などを決めて、区別し、時に優劣をつけることによって、時に縛られ、不自由になった。私は、キリストの真実があなたがたを律法の下から贖い出し、諸々の規定を廃棄し、自由を与えてくださった福音を苦勞して宣教してきた。その苦勞が無駄になったのではないかと心配している。

あなたがたも知っての通り、最初に福音を告げ知らせた時、私の肉体は弱っていた。その弱さはあなたがたを躓かせるものであったが、それを蔑んだり、忌み嫌ったりせず、私を傷つけるようなこともしなかった。パウロの肉体的な弱さは、マラリヤのような風土病、あるいはテンカンの発作であったなどの諸説があるが、それは、この世の価値判断からすれば、嫌われて、排除されるべきものであった。しかし、あなたがたはかえって、神の天使のように、そればかりか、キリスト・イエスのように受け入れてくれた。また、あなたがたは、私のために、自分の目を抉り出して与えようとまで言ってくれた。パウロは目が悪く、手紙を弟子に口述筆記させていたことは事実である。パウロから、人の行いに関わりなく、信仰によって義を与えてくださる福音を聞いて、大歎息したあの時の幸福感はどこに行ったのか。エルサレム教会から来たユダヤ教的キリスト者たちの、善い行いをすることによって義に与るという教えに惑わされ、福音の真理を語った私が敵になってしまったのか。救いは「善い行い」を励むことによって得られるという主張は、なるほどと納得し易い。ガラテヤの諸教会の人々は、このもっともらしい彼らの主張に引きずり込まれた。彼らがあなたがたに対し熱心なのは、善意からではなく、私をあなたがたから引き離し、自分たちに熱心にならせようとしたいからである。パウロは、人間の力を誇って、キリストの十字架の恵みを無にする反福音的な主張を断じて許せなかったのである。

パウロは「私の子どもたち」と優しく呼びかけ、「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、私は、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。できることなら、私は今、あなたがたのもとにいて、語調を変えて話せたらと思います。あなたがたのことで途方にくれているからです」と書いている。あなたがたの目の前に十字架のキリストを描き出し、その恵みによって自由を体得し、キリストが形づくられたが、今また、産みの苦しみをもう一度しなければならぬのか。あなたがたの所に行って、語調を変えて話してみたいと、途方にくれている。パウロは、「善い行い」に励んで義に至ろうとする反福音に陥った人々に落胆、失望し、福音の真理への回帰を強く訴えている。